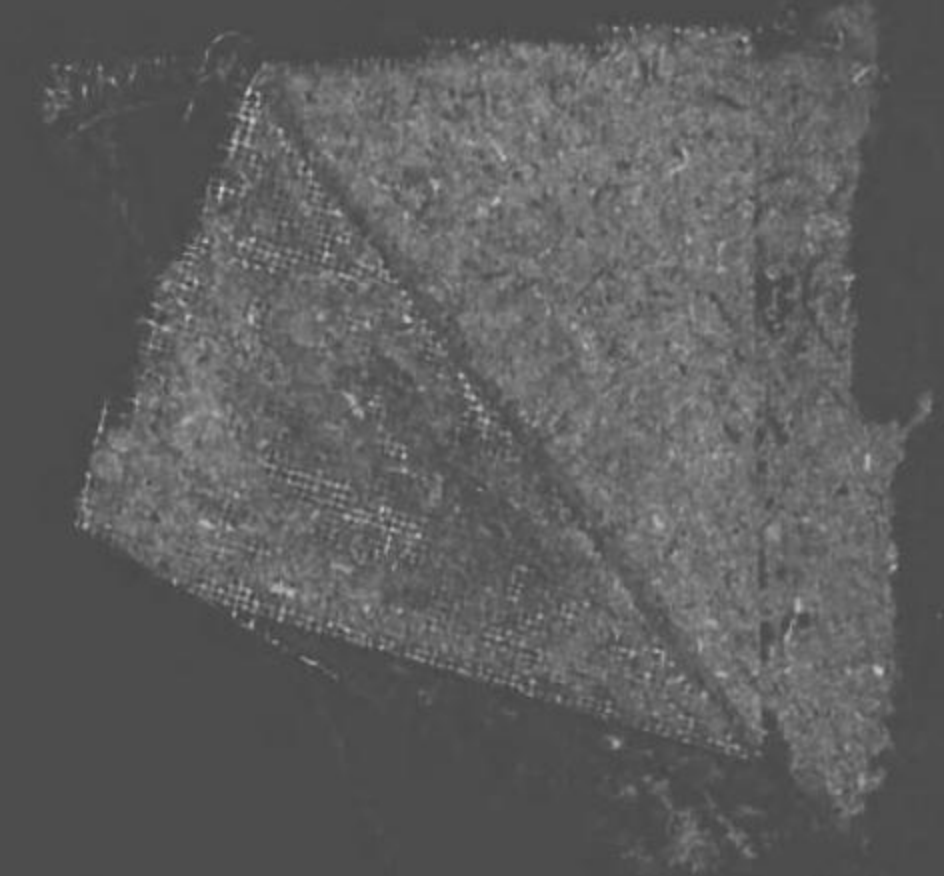
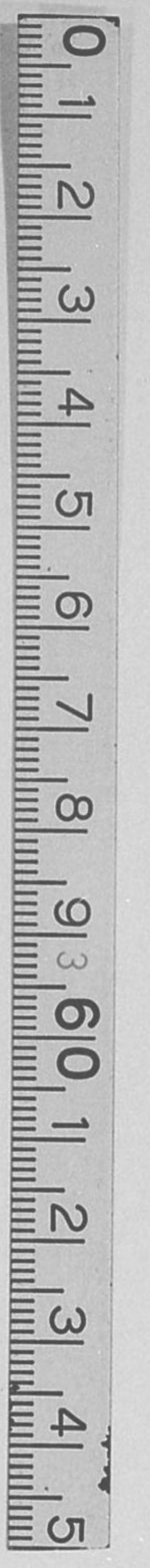


始



400
91
M





神

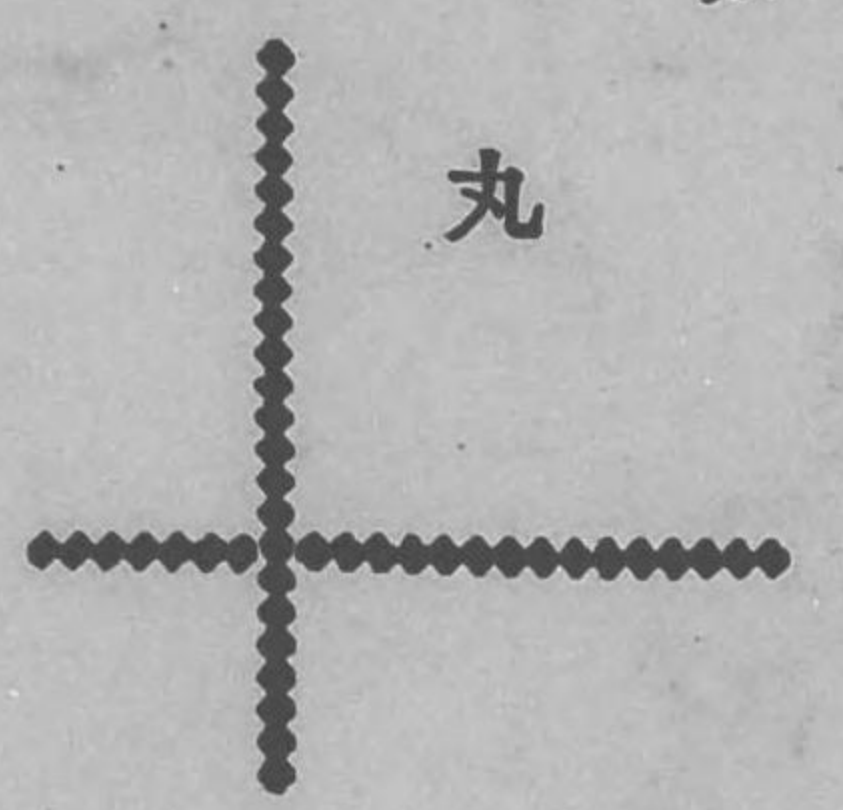
橋

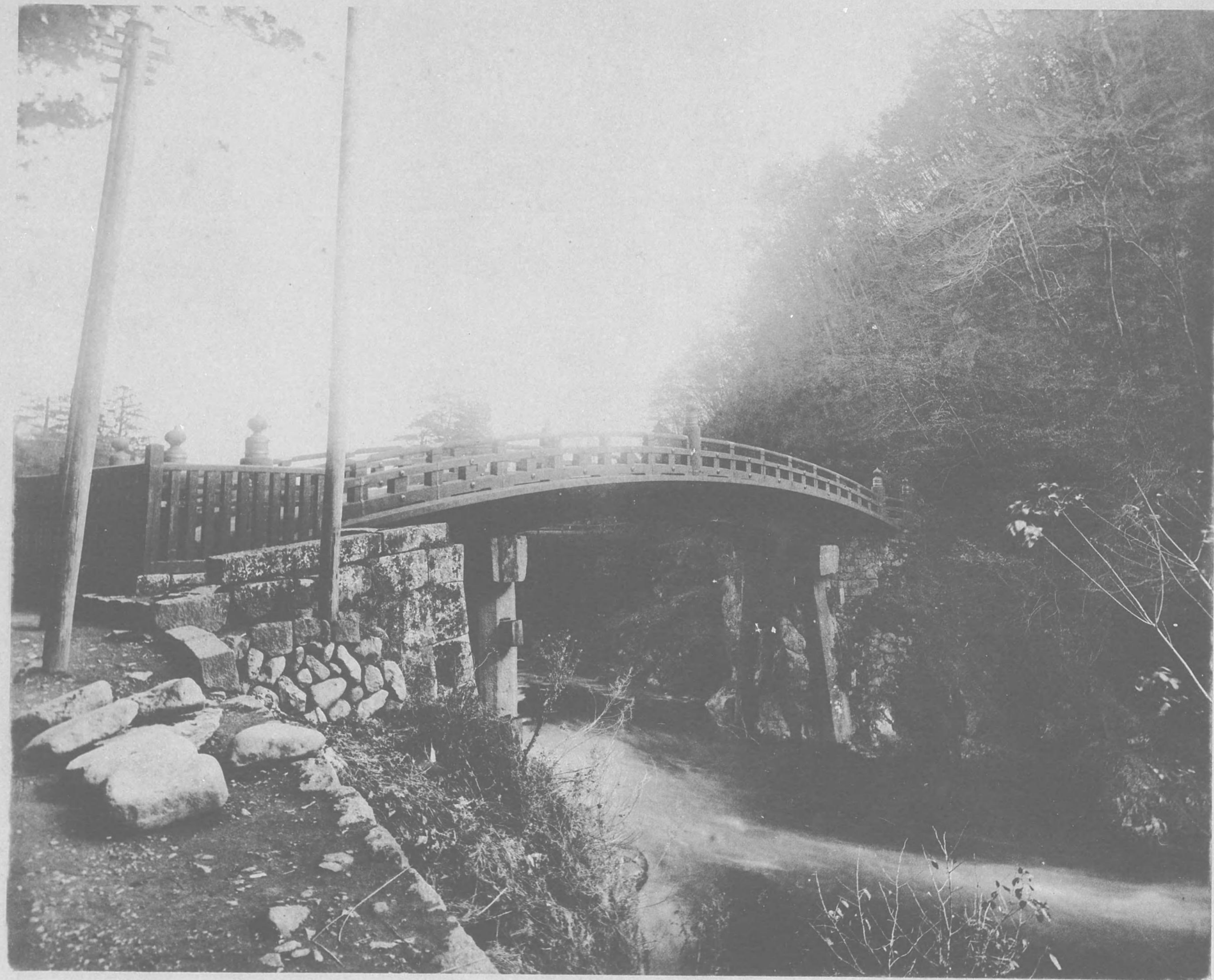
町を過ぐれば一溪の横まに道を斷ち山を抱いて奔來するあり、朱欄橋を架す、其の橋下の柱を石にし欄頭の葱寶珠を金にす、碧水と映帶して綺麗繪くが如し神護景雲の年勝道上人、初めて此山に入る此に至つて渉るべからず、山の靈青朱の二蛇を縦つて躍つて橋を作らしむ、蛇背潤滑にして渡るべからず、傍に自茅あるを取て之れを布き僅かに渡ると、荒唐の語と雖も亦た是佳詩、この橋人の渡るを許さず、橋の右十數歩にして更に一橋を架す……………麗水

むは玉の黒髮山のやま管に

こさめ降りしきますくう思ふ

人丸

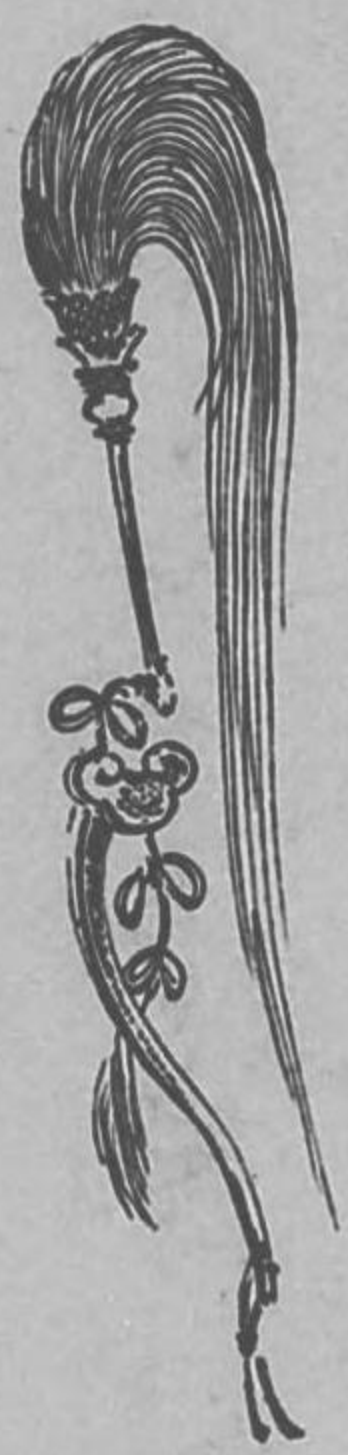




三 佛 堂

輪王寺内にあり千手観音馬頭観音

阿彌陀如來の三佛を祀れる堂なり



見物の客は薄暗き内陣に導かれ

さしてお蠟を勧めらるゝなり……



東照廟表門



參拜の客此處にて履物を脱し

更らに廟内一定の履物たる所

謂日光下駄を借りて門に入る

但靴は差支なし





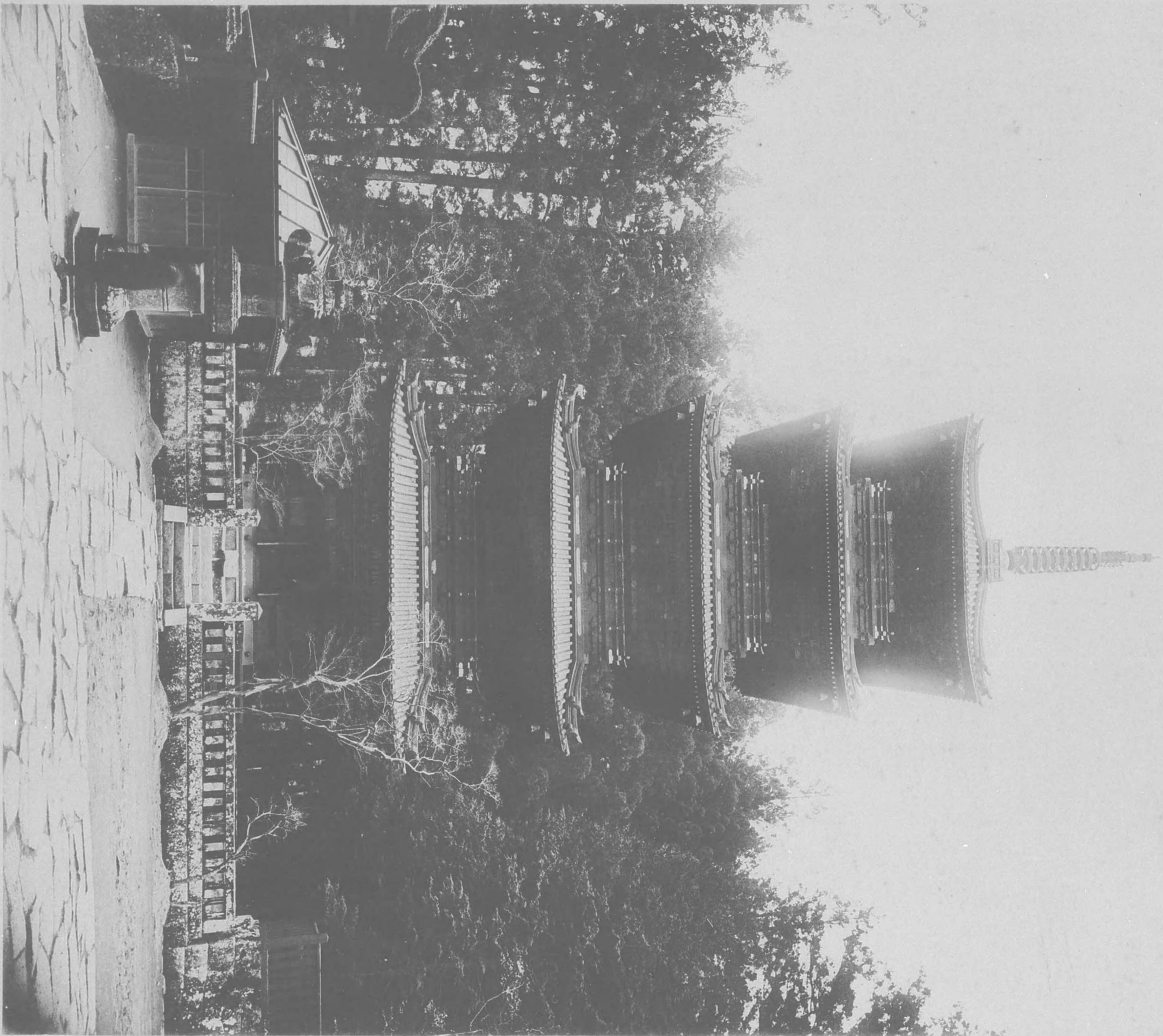
五重塔



東照廟表門前にあり若州小濱城主酒

井氏寄進之案内者は語る是を支ふる

柱一本にして移るに丹碧を以てす



御 廐

縦三間横五間餘總白木
造にして承塵の下に松
竹牡丹を刻み表には葵
の紋を附す金物は總て
鍍金せり廟中白木造は
これ唯一箇……………





神 庫

廡の向に對立す三棟總朱塗にして孰れ

も方木をもて積み上げたれば恰かも外

側蛇腹の如し破風下に灰白二象を刻す



水盤堂



御影の一本石長八尺五寸幅四尺

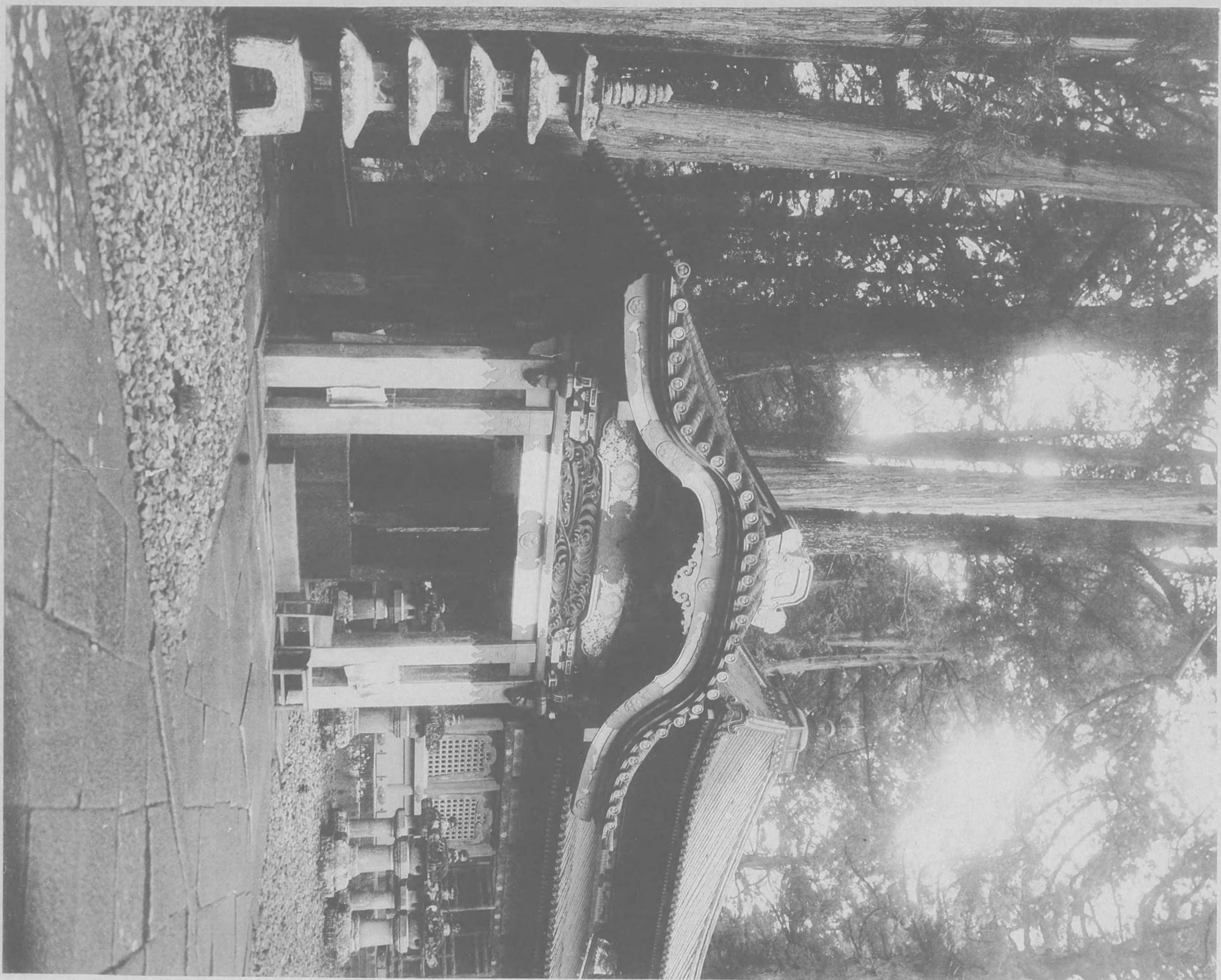
高三尺にして柱は一隅三本都合

十二本桁際黄銅を以て包み破風

下に飛龍を刻すこれ肥前佐賀城

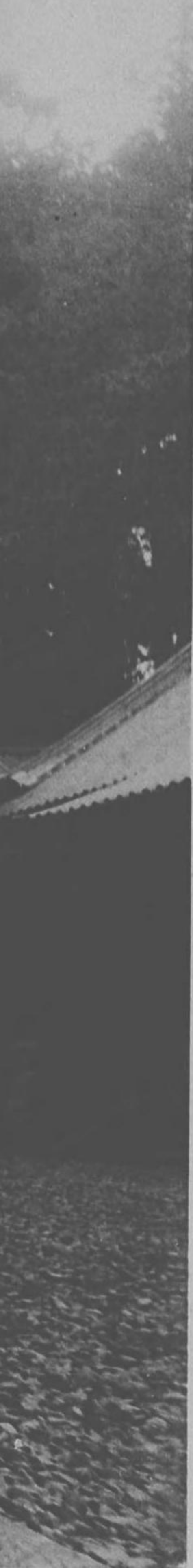
主鍋島信濃守の寄進……………





表門内全景

これ廐の前より見たる此邊の全景なり
建物一つく見るよりはやく打眺めた
る方一層結構なり………





飛越獅子



石段を登り盡せば左右玉垣の兩側

に柱と共彫の獅子あり其状恰かも

飛越ゑたる態あり秋元但州の寄進

なり傳へいふ本廟經營全く成るや

將軍親しく巡見せしも構造意に滿

たす心大に悦ばす漸く歸路此獅子

を見るに及び感賞措かず終に滞り

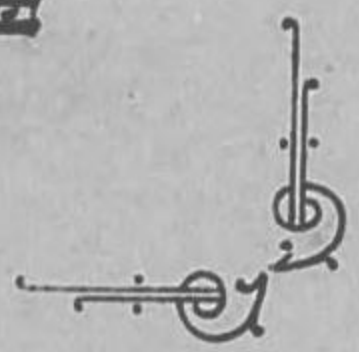
なく御巡見相濟むを得たりと

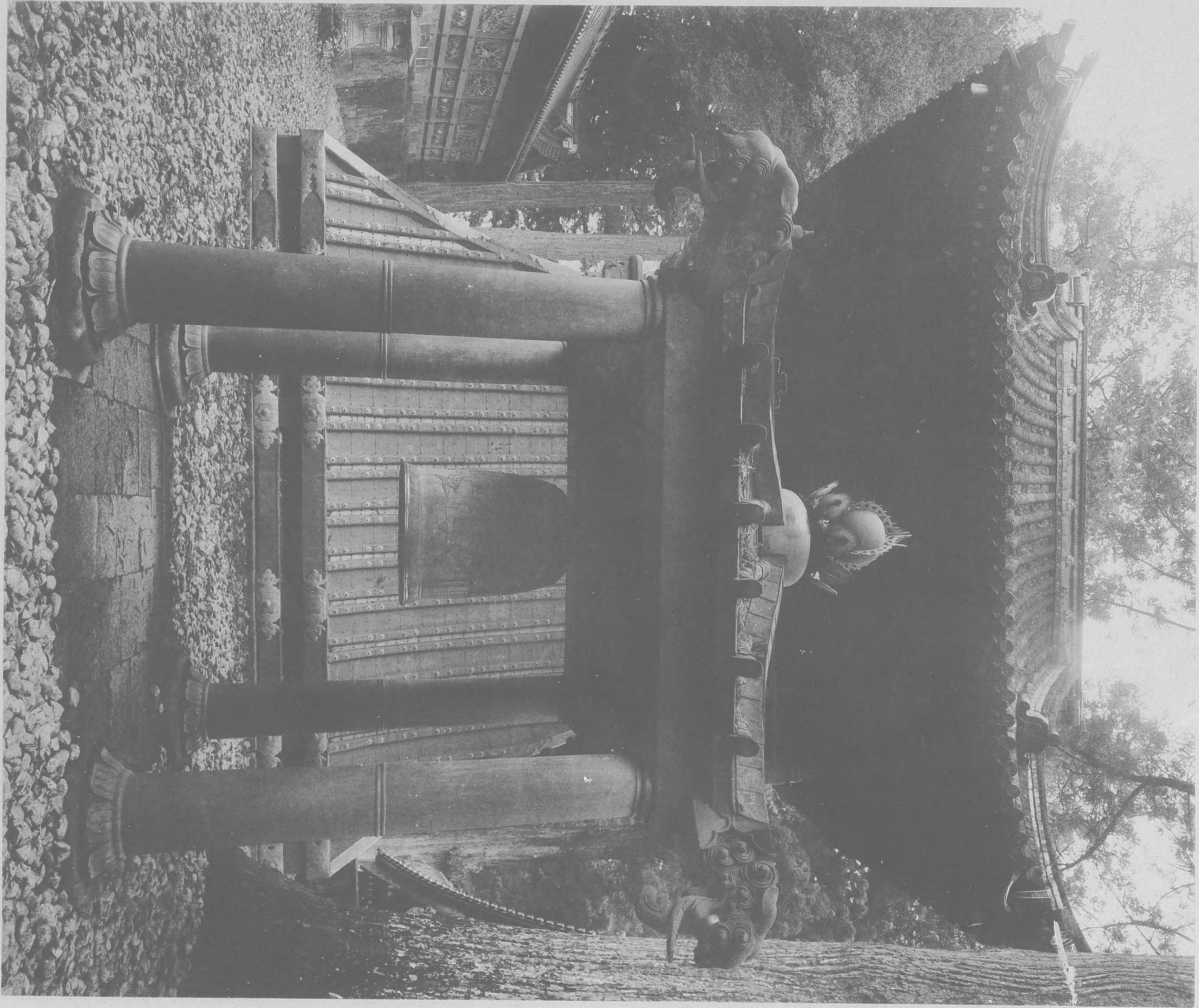




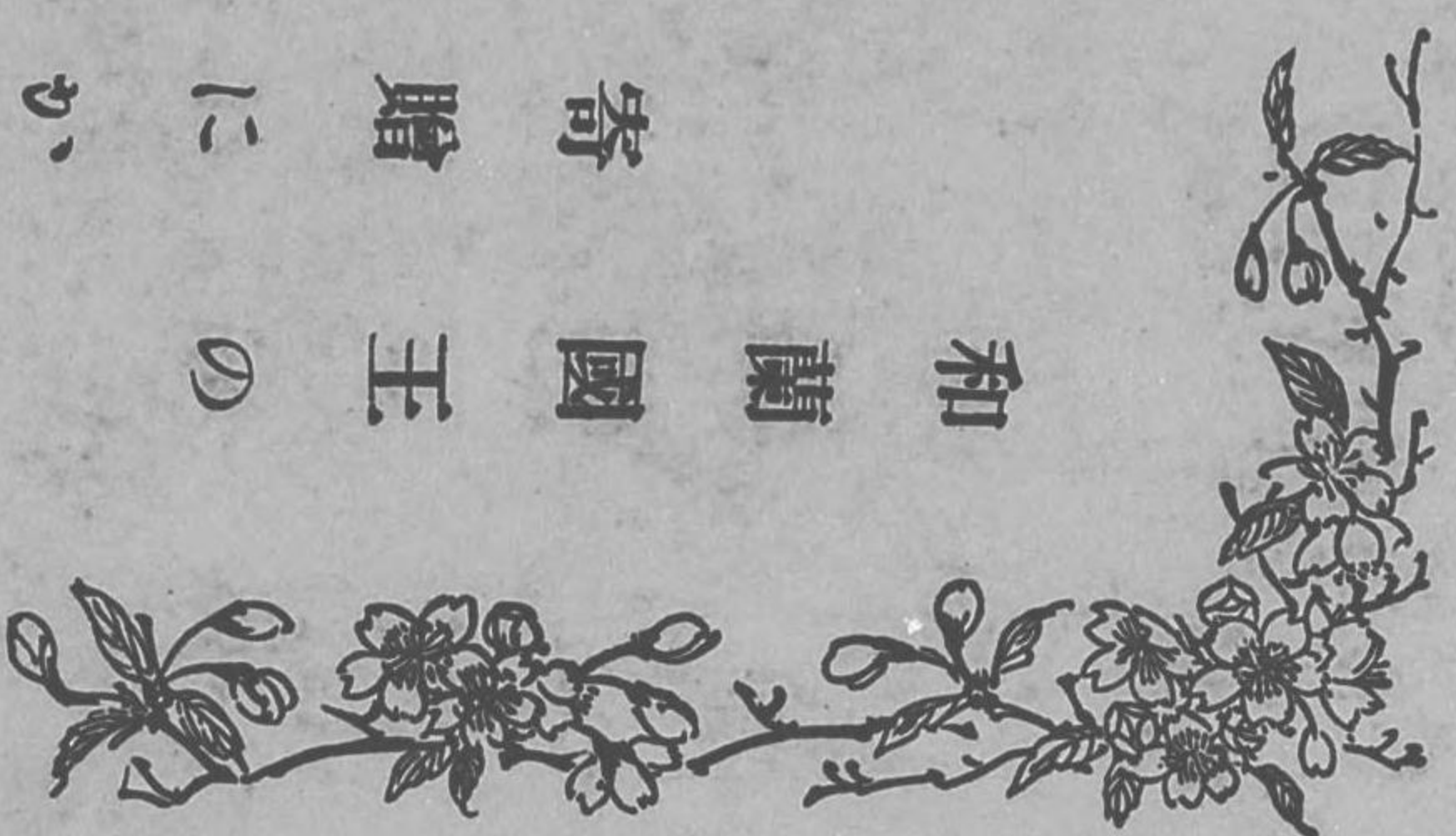
虫喰鐘

朝鮮國王獻する所



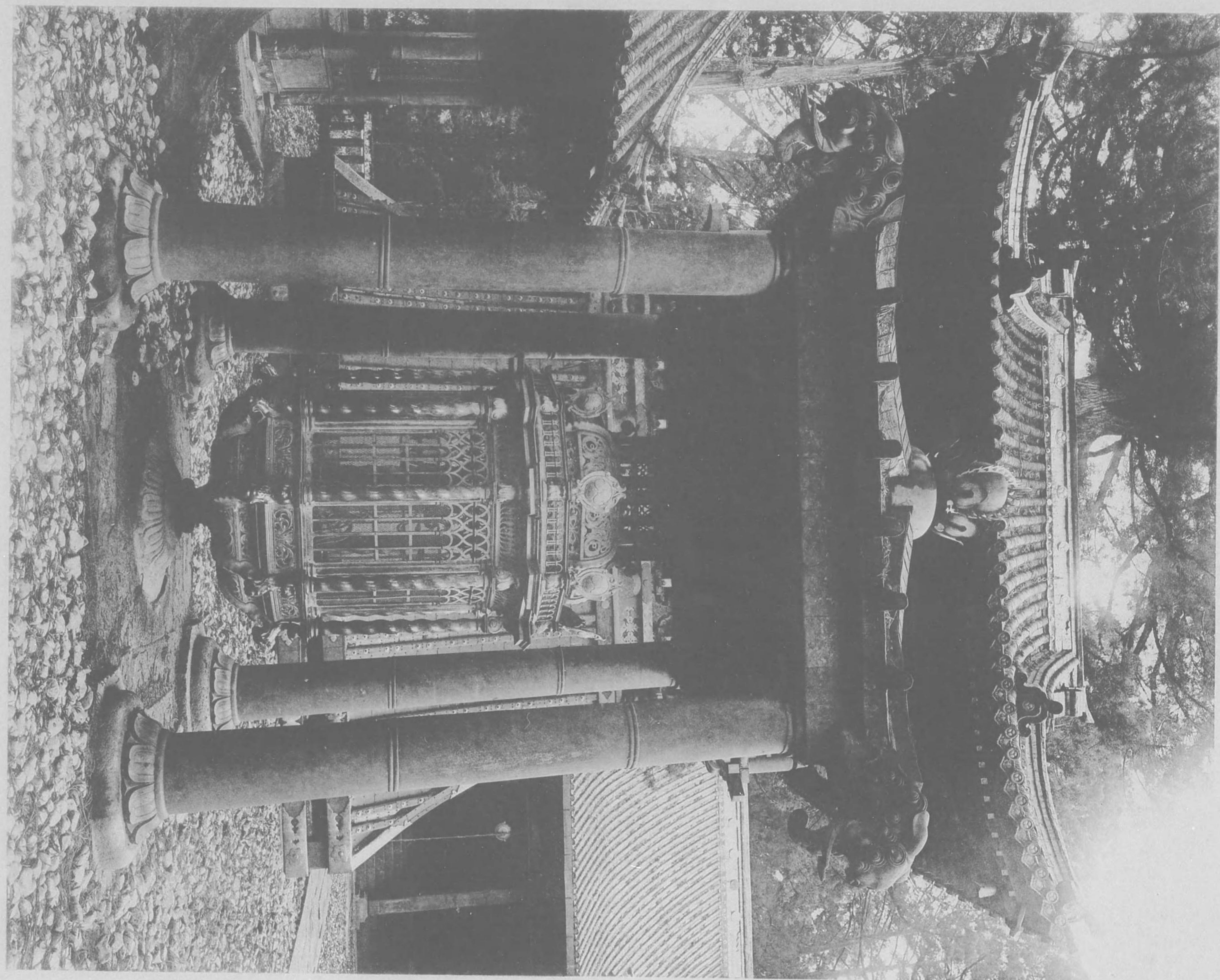


廻燈籠



和蘭國王の

寄贈にかゝるさいふ

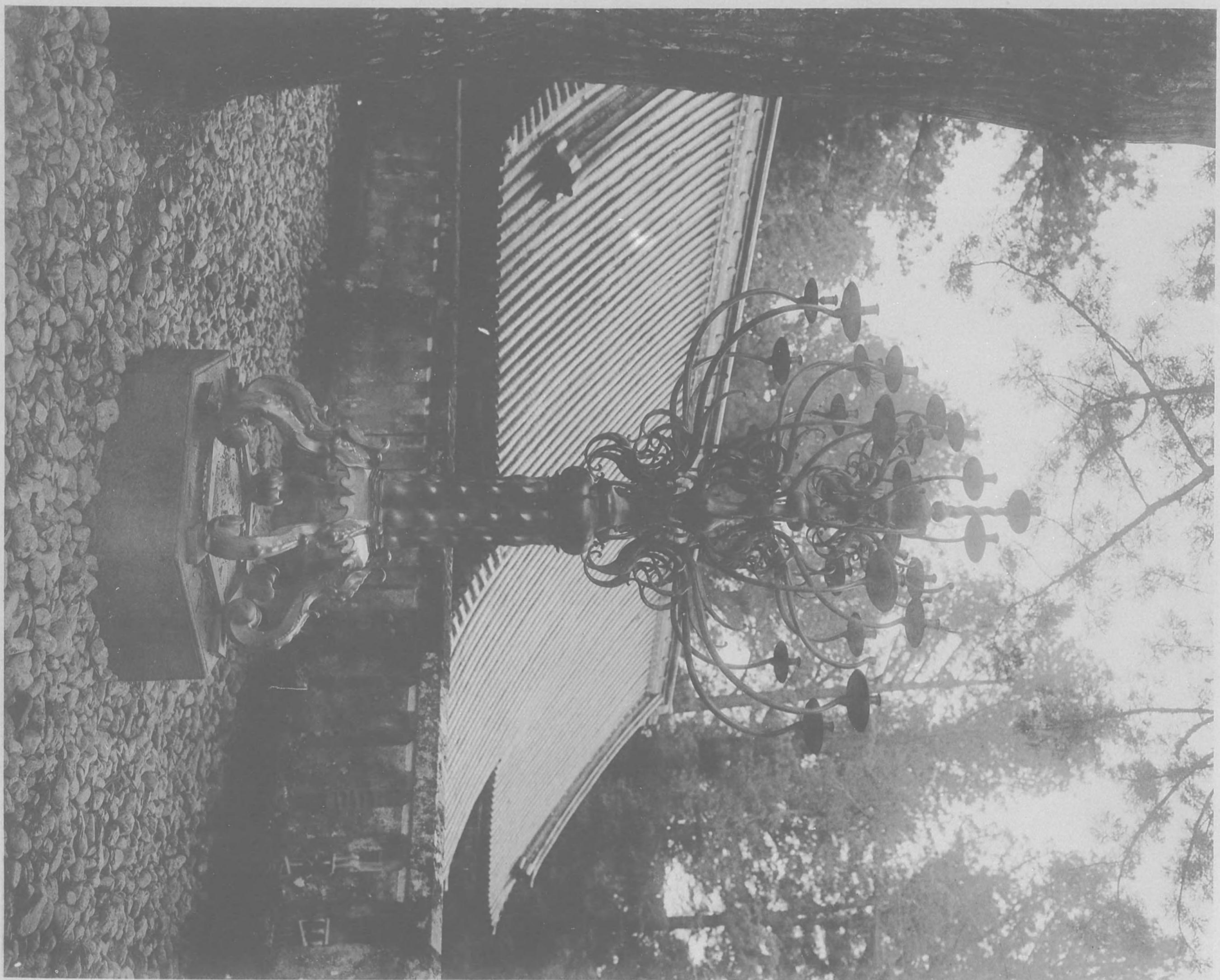


蓮燈籠

琉球王の

獻する所といふ





鐘樓

これその右にあるもの左に鼓樓
對立せり共に所謂東照神君家康
が軍に用ひたる鐘鼓を納む





陽明門

門は廣さ四間奥行二間俗に日暮しの門

こいふこれ終日望むも猶盡さずこの意
なり宜なり楣欄梁柱皆燦爛眩せんことす

表に極彩色の隨身あり天井には狩野守
信の升龍降龍俗に八方睨と稱ふるもの

あり柱十二本孰れも椶の丸柱にして中
柱に木目の虎を刻し裏手の一本は逆柱

にして俗に魔除柱と稱ふ此に來るの客
皆嗒然として歎美の辭を忘る





木目虎

陽明門の中柱に刻せる虎年を
經て客の之を撫するに従ひ漸
く其木地を現げし今や其木理
恰かも虎の班紋の如し





東照宮本社

これ陽明門を入りて先づ打見
たる本社全景なり正面にあ
るは唐門なり唐木を以て造る
故に名あり屋上に紫銅の恙虫
を置き外柱には雙龍を刻し間
楣破風等には孔子十哲及七福
人七賢人を刻す扉亦唐木一枚
板にして菊牡丹梅を彫刻せり
門を入れば拜殿あり……………





眠 猫

本社を出て坂下門に到る

中途の一門の承塵の下に

あり左甚五郎の作と傳ふ







寶塔

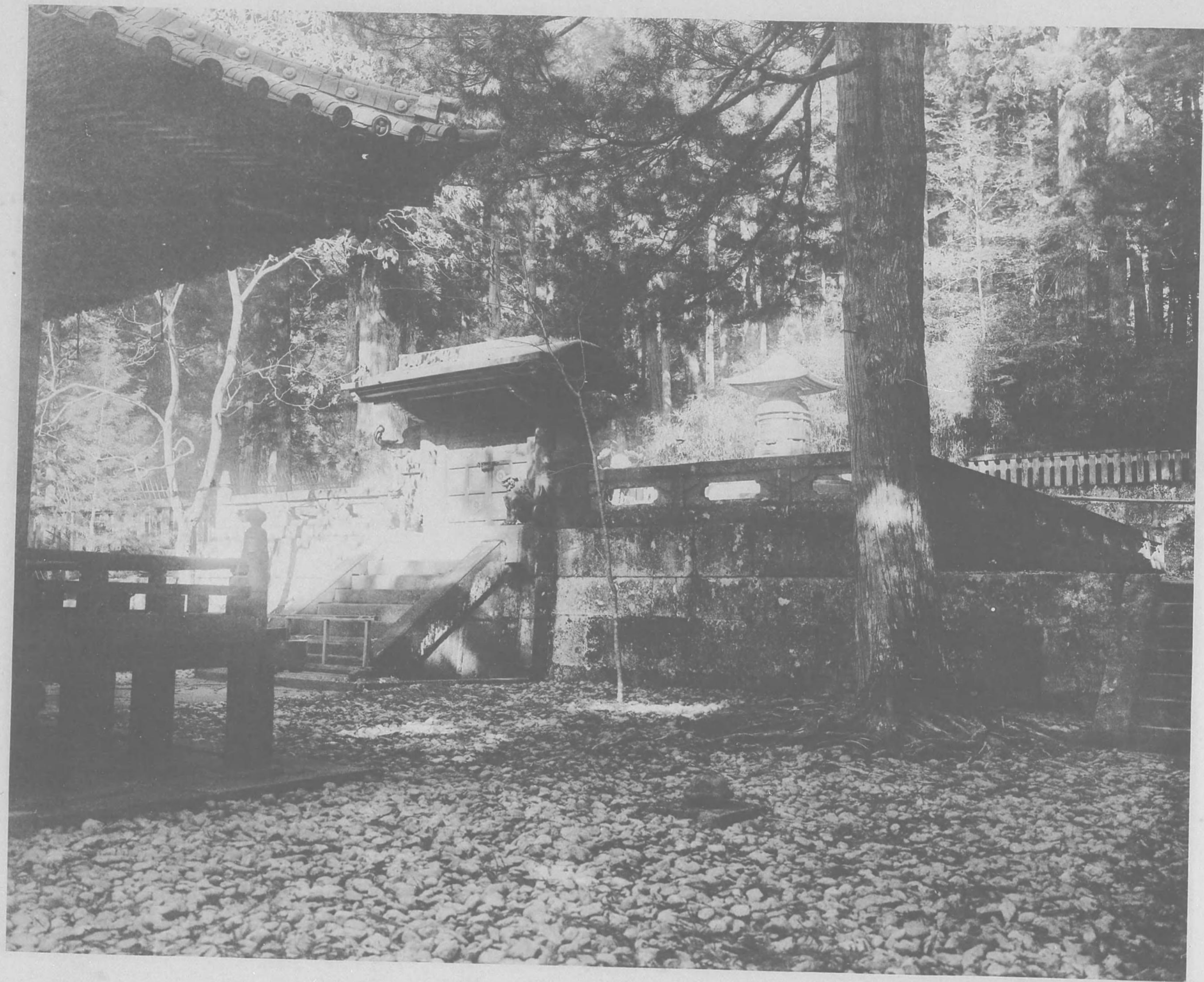
坂下門を経て二百四段の石階を

登ればこれ奥の院老杉深く翳して晝猶暗し拜殿の裏に青銅にて

高さ一丈餘なる擬寶球形の寶塔一基ありこれなん三百年前の老

雄瞑目の所……………





三代廟二王門

これより大猷院廟徳川

三代將軍家光の靈を祀

る所なりこはこの二王

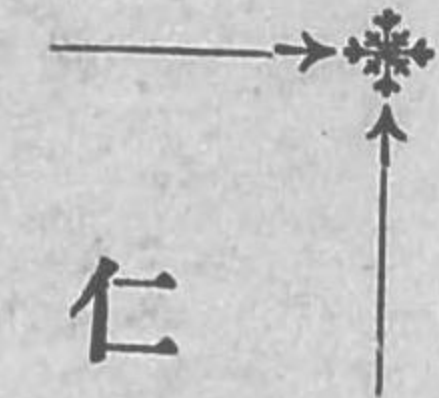
門にして左に那羅延金

剛右に密迹金剛を置く





仁 天 門



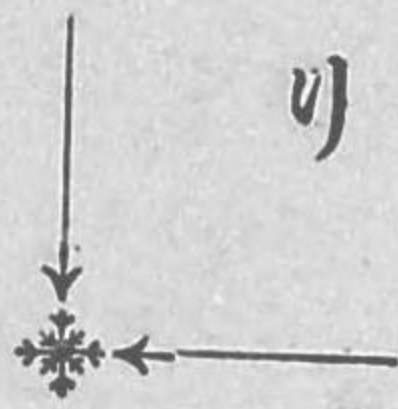
仁王門を入り左りにあり

表面左右に廣目天持國天

を安置し裏面に風雷二神

を置く大猷院なる匾額は

後光明天皇の宸筆なり





夜 又 門

仁天門より登ると七十二



級夜又門に達す前に鐘樓鼓樓あり

門の構造例の如く壯觀なり表に

毘陀羅捷陀羅を安置し裏に烏摩

羅阿跋摩の二夜又あり





三代廟本社



正面にあるは唐門なり殿内

其他鏤刻の精東照廟に譲らす



三代廟本社内部

仙宮の清麗浄土の莊嚴を



現世に目撃するは大猷廟の

内殿これなり柱楹天井ここ

ごこく塗るに漆を以てし彩

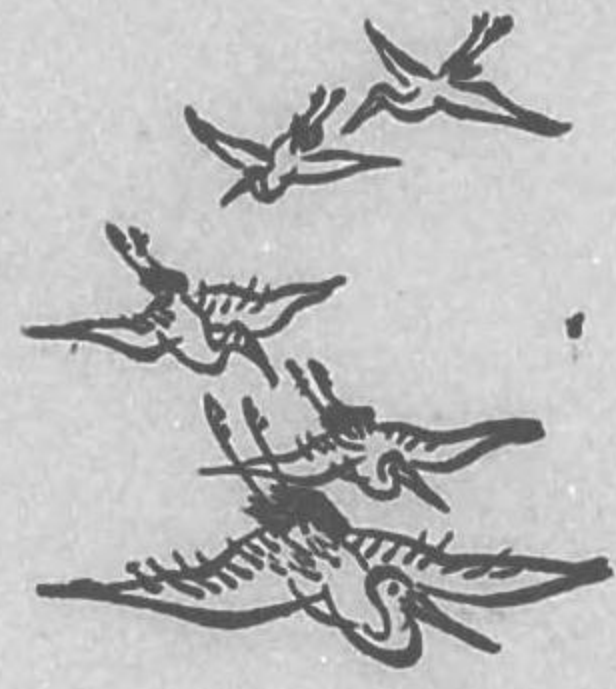
畫彫鏤七寶をつられ中央に

は金装の天蓋を懸け鍍金の

佛具燈籠等燦爛さかゝやき

渡り八音調和の樂器整然と

して陳列したり





光華門

本社を出て左折して家光寶塔に詣
る途中にあり俗に龍宮造りと稱す





含 滿 淵

大谷川の彼岸を傍ふて行くと五町ばかり琳宮寂寞梵唄靜かに聞ゆ慈雲寺といふこれを過くると西北數十歩にして所謂含滿淵なるものあり奇岩峭立溪水を束れて深潭となる水の色縹綠大渦小渦盤桓して流る石佛數十軀あり跌坐して潭に對す潭光青を曳き碧を舒べて日夜寂寞を歌ひ石佛獨り黙す雨淋霜打して眉目銷磨せんとし身に葛蘿の衣をまごひ面に苔髭の長さここ一寸なるあり奇古喜ぶべし北岸の大岩斧劈皴を成すのころ依稀として梵字を見る傳へ曰ふ弘法大師の此岸より筆を抛うちて書きしものと更に溪邊に靈庇閣あり坐して深潭を見るべし今は荒廢す……麗水



大 日 堂

こは日光十二景の一にして小池堂を周らし
水清く澄み湧けり中央に枝垂櫻の大なるも
の二本あり花時には其艶麗いかならむ此所
音に庭中の構致妙あるのみならず前には大
谷の急流鞆々の聲を放て流れ遙かに峰巒翠
を送り真に絶景と稱するに足る……………



あら尊と青葉若葉の日の光

は
せ
を



裏 見 瀑

神橋より一里餘荒澤とい

ふ所に存り高さ十丈幅二

貳怪岩上より直下崖道を

超えて飛ぶ故に人若し此

崖道を傳ふて進めは容易

に瀑下に到り其背を望む

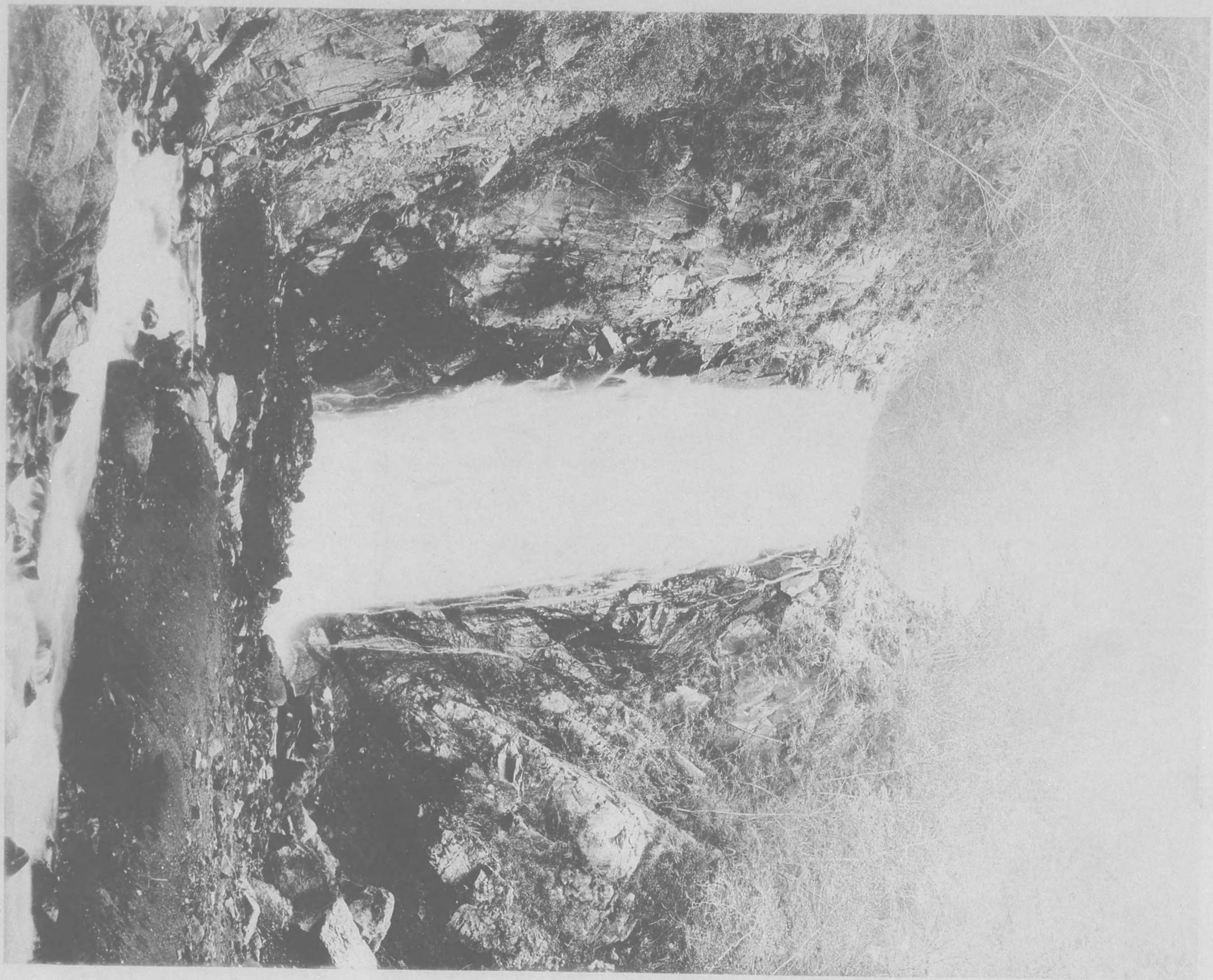
これこの瀑の名の起る所以





方 等 瀑

深澤を過ぎて劔ヶ峯にか
かる登ること少時にして
一茶亭あり此所より遙か
に二瀑のかけれるを望む
右に遠くして少さきは般
若瀑左近くして大なるは
方等瀑なり……………



華 嚴 瀑

仰き見れば一道の大瀑天を劈いて滾々崩落すると幾百丈無数の架塊層々を吐いて断ゆるか如くまた断にさるか如く始めはたゆたふか如きもその勢愈烈しくなりもてゆきて遂に轟然萬雷の音して潭底を撃ちなほたてまはしたる絶壁の隙より飛泉の濺々として送り出づるもの幾十條なるを知らず潭中沸々として鼎のわくか如く餘沫雪を吹いてまた寸碧を見ず(中略見る)一帯の白雲瀑の上頭を封じ來りて巖に迷ひ樹を抱き步趨躍動してさながら活きたるものゝ如きに鏽齒の重たるか如き絶壁の間に飛ひかふ幾百の岩燕一層の趣を添へていごをかしく水石相闘ふの音天地をざよもていさましくもまた物凄し……………大町桂月





中禪寺湖

こは歌の濱なり相對するは

所謂中宮祠背に男體の峻岳

を負ふものなり漣漪寄する

所旗亭二三あり欄に倚りて

洗洋たる湖光を弄ぶべし





戰場ヶ原の雪

荒涼たる戰場ヶ原

枯れたる

木残れる雪吹き

號ふ男體風

山氣凌々肌に徹す





湯原ヶ原

戰場ヶ原を過ぎて湯の

湖の決する所にあり斜

めに巖上を急下する所

大に奇なり

湯原ヶ原

湯 瀑



湯本温泉岳

蓬萊巖より水縁磬の如

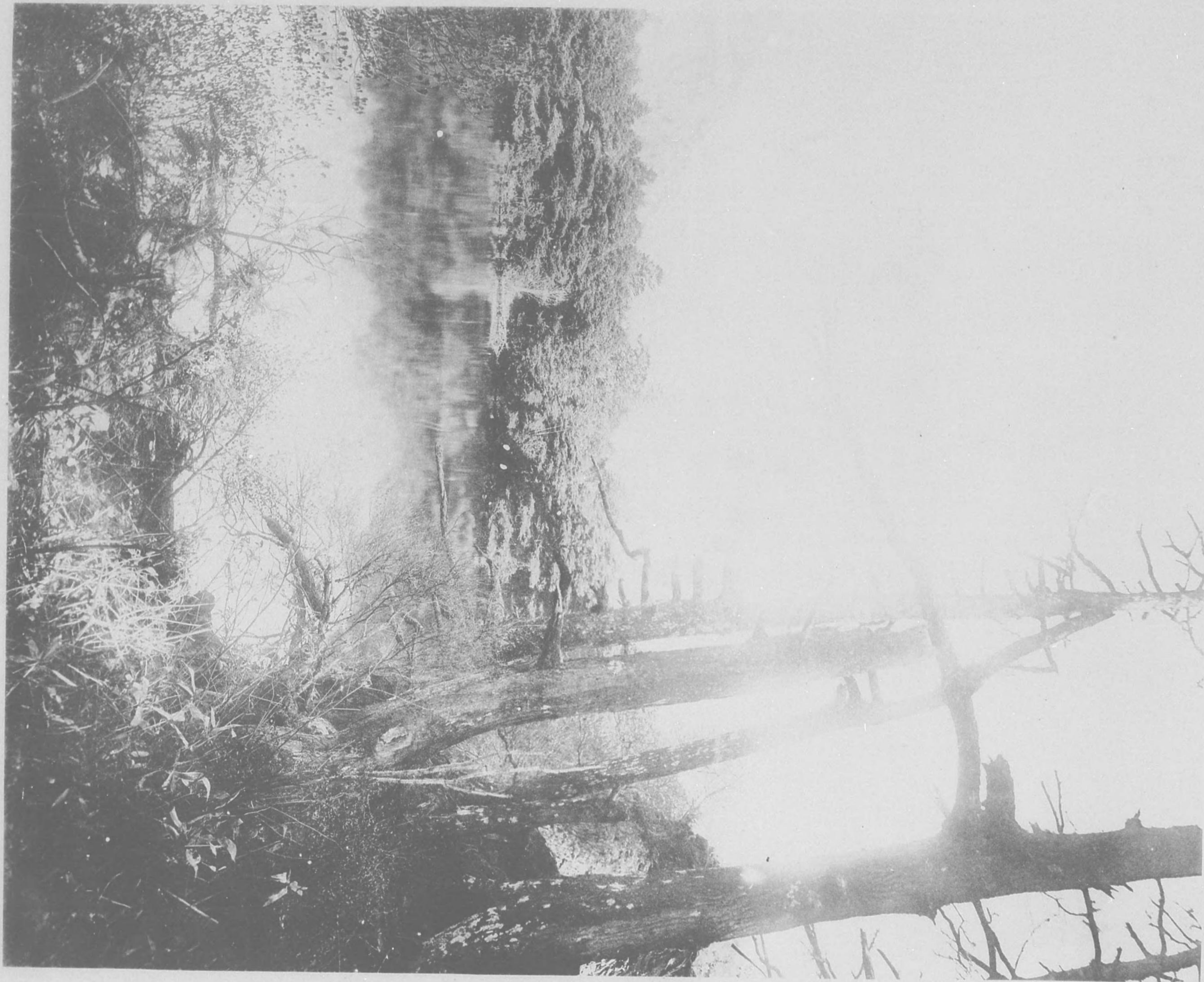
き湯湖を隔て、遙かに

温泉岳を望む所此邊の

光景大に幽邃恰かも北

米ヨセミテ溪の觀あり





明治三十三年十一月十日印刷

(非賣品)

明治三十三年十一月十五日發行

發行兼印刷者

中尾新太郎

神戸市北長狹通五丁目四十六番地
光村利藻方寄留

發行所

光村寫真部

神戸市北長狹通五丁目
四十六番地

印刷所

光村寫真製版部

神戸市北長狹通五丁目
四十六番地

400
91

終